

日本語・イタリア語における 反復表現の比較対照研究

— 疊 語 法 (epizeuxis) を 中 心 に —

古 浦 敏 生

§1 はじめに

まず「反復表現」の定義であるが、国語学会編『国語学大辞典』1980、東京堂出版 p.239 の「くり返し」の項によれば、“二度以上、同じ文字・語句・文・文章などを重ねて用いること。場合・目的・形式にはいろいろのものがあるが、総じてある種の効果を期待する際に用いられることが多い”とある。そして、その具体的効果として以下の項目が挙げられている（用例は一部古浦が変更）。

- ①一度の表現・理解では満足できないために生ずる。たとえば、酒に酔った場合や、老いの繰言など。
- ②調子を整えるとともに強調の意が含まれる。たとえば、童謡の「出た出た月が、まあるい、まあるい、まんまるい」など。
- ③間を持たせるもの。たとえば、狂言の「やるまいぞ、やるまいぞ」など。
- ④熱意を示すもの。たとえば、念仏の「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」など。
- ⑤意味を強めるもの。たとえば、「昔、昔の大昔」、「待ちに待った」など。
- ⑥それをそれとして認めるもの。たとえば、「東は東、西は西」など。
- ⑦複数を表わすもの。たとえば、「人々、花々」など。

次に、田中春美編『現代言語学辞典』成美堂 1988 の repetition 「反復法」の項を見ると、“表現効果を高めるために、同一または類似の語句またはその一部を繰り返す修辞法の総称”とある。そして、どの語句またはその一部をどのような仕方で繰り返すかによって、前辞反復、首句反復、結句反復、倒置反復、疊語法、隔語句反復、回帰反復、連辞疊用、頭韻法などに類別されることが記されている。

これらの「反復表現」のすべてを扱うことは非常に困難なので、本稿では、疊語法 (epizeuxis) を中心に論じていきたい。『現代言語学辞典』(上掲書)によれば、疊語法の定義として“同じ語句を繰り返すことによって強調性を高める修辞法。童謡などに多く見られる反復法の一つ”とある。そして、たとえば、「蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ」、「咲いた、咲いた、チューリップの花が／並んだ、並んだ、赤、白、黄色」の例が挙げられている。これは『国語学大辞典』(上掲書)の項目②に該当するものと思われる。以下、「疊語

法による反復表現」を「反復表現」と略し、その箇所には下線をほどこすこととする。

§2 先行研究

馬場俊臣氏作成のウェブサイト『反復表現・省略表現研究文献』（2008年6月7日更新）には、160種の文献が掲載されている。このうち「反復」・「繰り返し」というキーワードがタイトル（や備考欄）に含まれている文献は68種であった。これらはテレビ番組・新聞記事・論説文・随筆・日本人と留学生との対話などを資料として、反復の頻度・効果・出現区間などを探ったものである。これらは主として日本語教育学プロパーの領域のものであるが、「日本語 vs 米語」・「日本語 vs 台湾語」・「日本語 vs トルコ語」の対照研究も1種ずつ存在する。ただし、今のところ、日本語とイタリア語との対照研究は皆無であった。

§3 方法論

筆者はここ数年来、日本語とイタリア語との比較対照研究を推進している。本稿では量語法に着目し、有吉佐和子（注1）の『紀ノ川』・『華岡青洲の妻』の日本語原文（注2）とそれらのイタリア語訳（注3）を資料とした。有吉作品はいずれも和歌山県を舞台とした小説であって、製作年も大差はない（注4）。また、イタリア語訳も同じ人物によるものなので、作品ごとに分析するのではなく、一括統計処理し記述することとする。

次の用例を見られたい。

(例 1a) 「ええよ。行て来い、行て来い」（「紀川」 p.93）

(例 1b) «*Sì, va' pure.*»（「紀川」伊訳 p.79）

(例 2a) 「お母さんは古うて古うて、どないにもなりません。」（「紀川」 p.111）

(例 2b) «*La mamma è antiquata, antiquata, non c'è niente da fare!*»（「紀川」伊訳 p.100）

(例 3a) 加恵は…明るく明るく答えた。（「華岡」 p.73）

(例 3b) *Kae rispose con allegra giovialità*…（「華岡」伊訳 p.91）

(例 4a) 別棟を建て増しても建て増しても収容しきれなくなったので…（「華岡」 p.192）

(例 4b) …*i padiglioni fino ad allora costruiti erano inadeguati a ospitarli.*（「華岡」伊訳 p.207）

(例 1a)・(例 2a)・(例 3a)・(例 4a)は有吉の日本語原文であり、(例 1b)は(例 1a)の、(例 2b)は(例 2a)の、(例 3b)は(例 3a)の、(例 4b)は(例 4a)の、それぞれイタリア語訳である。下線をほどこした原文の反復箇所に該当するイタリア語訳には、反復が見られればその箇所に下線を付し、そうでなければ可能な限り意味的に一致する箇所を斜体とする。

(例 1a)の反復箇所「行て来い、行て来い」は(例 1b)では反復されないで、「*va' pure*.行て来い」の1回のみとなっている。しかし、(例 2a)の反復箇所「古うて古うて」は(例 2b)でも「*antiquata, antiquata*」と反復されている。(例 3a)の反復箇所「明るく明るく」は(例 3b)では「陽気な愛想の良さでもって」と前置詞句の表現となっている。(例 4a)の反復箇

所「建て増しても建て増しても」は(例 4b)では「その時までには建てられた建物は、彼ら(＝入門者)を収容するに不十分であった」という別の表現になっている。また、(例 1a)・(例 2a)は会話文であるが、(例 3a)・(例 4a)は地の文である。この際、イタリア語訳において反復が生じているのは会話文の(例 2b)のみである。

ここで、筆者には以下の疑問が生じた。

- ①日本語原文の反復表現がイタリア語に訳される場合、どの程度反復表現のままに対応しているのか？また、反復表現にならない場合、どのような表現で代替されているのか？
- ②地の文と会話文とで差異はないか？

この調査を進めていく前に、あらかじめ次のことを考慮しておく必要があると思われる。すなわち、たとえば、原文において「雨が…じめじめと降り続けた」(「紀川」 pp.47-48)という場合、「*雨が…じめと降り続けた」と「じめ」を1回のみにした表現は非文である。したがって、「じめじめ」は形態的には反復表現ではあっても、実際には単一的な表現である。このような反復は本稿では除外することとする。以下、その用例を若干提示しておく。

太兵衛は日向に出てうつらうつらしている(「紀川」 p.30)

八月になると…カンカン照りになって(「紀川」 p.48)

わしもちよくちよく上京するよになるかいよ(「紀川」 p.113)

美しさは衰えずに四十そこそこにしか見えなかった(「紀川」 p.153)

華子は…いかにも子供子供している(「紀川」 p.214)

§4 用例

用例はイタリア語訳において反復表現で対応しているものとそうでないものとに大別し、『紀ノ川』『華岡青洲の妻』の順に、そして、出現ページ順に提示することにしよう。なお、用例の頭には会話文であれば【会】、地の文であれば【地】の印を記すこととする。

(1) 反復表現で対応している用例

【会】「ふん、見える、見える。」(「紀川」 p.18)

《Si. Eccoli! Eccoli! 》(同上伊訳 p.17)

【会】「オーイ、オーイ」川上から…男の音が聞こえてくる。(「紀川」 p.49)

《Ehi! Ehi!», gridava un uomo lungo il fiume (同上伊訳 p.44)

【会】「お母さんは古うて古うて、どないにもなりません。」(「紀川」 p.111)

《La mamma è antiquata, antiquata, non c'è niente da fare!》(同上伊訳 p.100)

【会】「新池さんも敗ける敗けると云うて…」(「紀川」 p.231)

《E anche il mio cognato del Nuovo Laghetto continua a ripetere : “perderemo, perderemo” …》(同上伊訳 p.206)

【会】「死んだ後のことは考えいでもええと思うたら、肩の荷がすいと消えたようで、もう嬉しゅうて、嬉しゅうて…」(「紀川」 p.274)

- «Non dovevo più angustiarmi per ciò che sarebbe accaduto dopo la mia morte, mi sentivo sollevata da un grande peso e felice, felice…!» (同上伊訳 p.239)
- 【会】「ほれ、ほれ、嬢さん」(「華岡」 p.5)
 «Ecco! ecco, signorina!» (同上伊訳 p.15)
- 【会】(於繼は) それはそれは美つついおひとやえ… (「華岡」 p.6) (注5)
 «È così bella, così bella!» (同上伊訳 p.17)
- 【会】「…儂は於繼を抱えてよ、しっかりせえ、しっかりせえと夢中やった。…」(「華岡」 p.37)
 «…Io tenevo Otsugi tra le braccia e mi affannavo a ripeterle : ‘Coraggio, coraggio!’ …» (同上伊訳 p.52)
- 【会】「嫁さん見るんや、嫁さん見るんやあ」(「華岡」 p.39)
 «Voglio vedere la sposa ! Voglio vedere la sposa !» (同上伊訳 p.54)
- 【会】「そう勇まし伊に切る、切ると云いなや。…」(「華岡」 p.58)
 «Non continuare a ripetere così baldanzosamente ‘tagliare, tagliare’. …» (同上伊訳 p.75)
- 【会】「ほほう、ほほう。またそれは何に使う道具やろかのう」(「華岡」 p.59)
 «Oh, oh ! E quello a che serve?» (同上伊訳 p.76)
- 【会】「しっかりしなさいや、しっかりしなさいや。」(「華岡」 p.88)
 «Coraggio ! Coraggio ! …» (同上伊訳 p.107)
- 【会】「兄さん、兄さん」末の妹たちが喧しく呼んでいる。(「華岡」 p.106)
 «Fratello, fratello !» Urlavano le sorelle minori. (同上伊訳 p.125)
- 【会】「やめエ、やめエ、やめんか」妻には叱りつけ… (「華岡」 p.118)
 «Basta ! Basta ! Basta !» gridò alla moglie, …» (同上伊訳 p.137)
- 【会】「お母はん、お母はん」…呼びかけると… (「華岡」 p.127)
 «Madre ! Madre !» gridò… (同上伊訳 p.145)
- 【会】「お母はん、お母はん」と、かなり大声で呼んだ。(「華岡」 p.130)
 la chiamò a gran voce : «Madre ! Madre !» (同上伊訳 p.148)
- 【会】「小弁を、小弁を」宙を搔きながら加恵は夫に云った。(「華岡」 p.138)
 «Koben, Koben.» Implorava il marito annaspando. (同上伊訳 p.156)
- 【会】「分った、分った」(「華岡」 p.139)
 «Va bene, va bene.» (同上伊訳 p.156)
- 【会】「小陸さん、小陸さん」義妹を呼ぶと… (「華岡」 p.156)
 Chiamò quindi la cognata : «Koriku, Koriku ! …» (同上伊訳 p.172)
- 【会】「加恵さんは、私が幾日も幾日も数えきれやんほど長く眠っていたと云うたんやしてよし」(「華岡」 p.157)

《Kae ha detto che ho dormito tanti e tanti giorni da non poterli contare.》(同上伊訳 p.173)

【会】「…嫂さんは、嫂さんは、小弁の死ぬずっと前から目が損んでなしたんや。…」(「華岡」 p.167)

《Lei, lei…soffriva già molto prima della morte di Koben!…》(同上伊訳 p.182)

【会】「私は、私は知らなんだんやしてよし。…」(「華岡」 p.168)

《Io…io non sapevo. …》(同上伊訳 p.184)

(2) 反復表現で対応していない用例

【地】夜の道を、間のびした調子で幾度も幾度も繰返しながら、花嫁行列は樋ノ口を廻って揚ノ垣内にある真谷家へ繰りこんだ。(「紀川」 p.21)

Il corteo della sposa procedette lentamente e *con molte diversioni* lungo la strada immersa nell'oscurità, per poi giungere finalmente alla casa dei Matani a Agenogaito. (同上伊訳 p.20)

【地】まことにまことに一言もなく…(「紀川」 p.33)

Non ho parole per esprimere le mie sincere scuse. (同上伊訳 p.31)

【地】まだまだ地方には旧正月を祝う習慣が残っていて…(「紀川」 p.42)

tuttavia in campagna si usava *ancora* festeggiare il vecchio capodanno lunare: (同上伊訳 p.38)

【会】「ええよ。行て来い、行て来い」(「紀川」 p.93)

《Sì, *va' pure*.》(同上伊訳 p.79)

【地】姑のヤスなどは眼をこすりこすり心配している。(「紀川」 p.93)

la nonna Yasu, che si *sfregava* sconsolatamente gli occhi. (同上伊訳 p.80)

【地】文緒ほどの勢もなく、ふわあんふわあん、と気の抜けた泣き声(「紀川」 p.95)

piagnucolare con un timbro ben diverso dagli strilli vigorosi di Fumio (同上伊訳 p.81)

【会】「ま一度」「ま一度」(「紀川」 p.133)

《*Ancora una volta*.》(同上伊訳 p.118)

【地】こないこないして露見してしもうた(「紀川」 p.171)

Così mi ha scoperto. (同上伊訳 p.153)

【地】幾度も幾度も同じことを繰返していた。(「紀川」 p.176)

Ripeteva *continuamente* il medesimo ritornello. (同上伊訳 p.157)

【会】大嬢さんのお嫁入りを見たかった見たかったて、六十谷中がいいくらししました。(「紀川」 p.180)

Tutti a Musota non facevano che dire: 'come sarebbe bello *assistere* alle nozze

della signorina !' (同上伊訳 p.160)

【地】 痩せ細った腕、手の甲、指。額の生え際から後頭部へ何度も何度も繰返し動くのを(華子は) 見ているうちに(「紀川」 p.270)

Hanako osservò il movimento con cui l'esile braccio, la mano, le dita si spostavano dalla fronte alla nuca. (同上伊訳 p.236)

【地】 華子は…丹念に幾度も幾度も櫛を通した。(「紀川」 p.271)

Hanako pettinava la nonna con gesti delicati (同上伊訳 p.236)

【会】 私の葬礼すましたあとで皆が慌てるやろと思うたら、もう面白うて、面白うて…(「紀川」 p.274)

L'idea che dopo le mie esequie sarete in un grave imbarazzo *mi diverte!* (同上伊訳 p.239)

【会】 「私は努め努めて今日まで来ましたが…」(「華岡」 p.19)

《…Finora ho vissuto *prodigandomi* come meglio potevo…》(同上伊訳 p.34)

【会】 「先の先まで見通して加恵を望んでおくれたのかと思うと…」(「華岡」 p.27)

《Se penso che ci ha fatto il favore di volere Kae, perché già prevede quello che accadrà in *un futuro lontano*, …》(同上伊訳 p.42)

【地】 この家で於継を初めて見たときの思い出が抑えても抑えてもこの花を見ていれば甦ってくる。(「華岡」 p.69)

Per quanto si sforzasse di soffocare i ricordi della prima volta in cui aveva veduto Otsugi in quella casa, le bastava guardarli e tutto le tornava alla mente. (同上伊訳 p.88)

【地】 加恵は…明るく明るく答えた。(「華岡」 p.73)

Kae rispose *con allegra giovialità*…》(同上伊訳 p.91)

【地】 加恵が気晴らしにいい着物を着ると、それはそれは厭な顔をする。(「華岡」 p.89)

…quando Kae, per rincuorarsi, indossava un bel kimono, la suocera mostrava un'espressione contrariata. (同上伊訳 p.107)

【会】 「…しっかりしなさいや。しっかりしなさいや。」(「華岡」 p.89)

《Sii prudente, *coraggio*…》(同上伊訳 p.108)

【地】 加恵は出産の日まで幾度も幾度も母親のこの言葉を胸の中で繰返し、心を鎮めた。(「華岡」 p.91)

Ripeté nella sua mente *molte volte*, fino al giorno del parto, quelle parole materne, che acquistavano il suo animo. (同上伊訳 p.110)

【会】 「…まだまだそんな御大層な家にはなりませんわ。…」(「華岡」 p.92)

《Non è *ancora* una famiglia così importante…》(同上伊訳 p.110)

【地】 狂ったように吠えまわってくるくるくるくる一箇所を廻っている犬(「華岡」 p.93)

- altri (cani) che abbaiavano come impazziti e continuavano a girare su se stessi
(同上伊訳 p.111-112)
- 【地】同じ言葉を繰返し繰返し、争いは続いた。「華岡」 p.117
Continuarono a disputare *ripetendo* le medesime frasi. (同上伊訳 p.137)
- 【地】加恵のように三十歳半ばでさえも数本の白毛は抜いても抜いても生えてくるのに
…「華岡」 p.121
mentre Kae, già a trentacinque anni, non poteva più farlo tanti ne spuntavano
(同上伊訳 p.140)
- 【地】於継は…湯の中に髪を泳がせては幾度も幾度も洗っていた。「華岡」 p.121
Otsugi si lavò *più volte* i capelli lasciandoli fluttuare in un bacile d'acqua calda.
(同上伊訳 p.140)
- 【会】「…成功した成功したと、あないに触れまわられたら…」(「華岡」 p.135)
《Continua a raccontare a tutti che *è stato un successo*,…》(同上伊訳 p.153)
- 【地】長い長い髪 (「華岡」 p.136)
i lunghissimi capelli (同上伊訳 p.154)
- 【地】加恵は…幾度も幾度も繰返されるうちにようやく、それが夫の唇から注ぎこまれていることに気附いていた。「華岡」 p.144
Kae…*dopo ripetuti sorsi capì che stava suggendo dalle labbra del marito.* (同上伊訳 p.161)
- 【会】「…ほうか、ほうか」(「華岡」 p.147)
《…Sì, *vero?*》(同上伊訳 p.163)
- 【会】「…ない。ほうか、ほうか」(「華岡」 p.147)
《…No? *Davvero?*》(同上伊訳 p.164)
- 【会】「うん、なるほど、うん、なるほど」(「華岡」 p.149)
《Ah, *ma certo!*》(同上伊訳 p.165)
- 【地】青洲は着物の裾をすっかりはだけて、…ほどいては縛り、縛っては解き、玩具に熱中する子供のように幾度も幾度もそれを繰返した。「華岡」 p.149
Seishū, dopo aver scostato ampiamente le falde del kimono, continuò a stringersi e a disfare *più volte* il legame, …come un bambino assorto in un giocattolo. (同上伊訳 p.165)
- 【地】(加恵は)小弁で充分役に立つからと断っても断っても於継が承知しなかった。「華岡」 p.149
Kae aveva tentato *più volte di rifiutare* dicendole che avrebbe provveduto Koben, ma Otsugi non si era lasciata convincere. (同上伊訳 p.165)
- 【地】抑えても抑えても喉の奥から笑い声が洩れる。「華岡」 p.152)

Per quanto tentasse di frenarsi, ogni tanto le sfuggiva un'allegria risata. (同上伊訳 p.169)

【会】「目が痛い、痛い」と言い出してのし。…」(「華岡」 p.166)

《*Continua a lamentarsi che le fanno male gli occhi.* …》(同上伊訳 p.182)

【地】別棟を建て増しても建て増しても収容しきれなくなったので…(「華岡」 p.192)

i padiglioni fino ad allora costruiti erano inadeguati a ospitarli. (同上伊訳 p.207)

§5 用例の分析と結果

前節に掲載された用例の数を集計した結果が下の表である。この表の意味するところは、

表現	会話文	地の文	計
反復	22	0	22
非反復	13	23	36
計	35	23	58

すなわち、“日本語原文において反復表現が見られる箇所は全部で 58 箇所である。その内訳は、会話文が 35 箇所、地の文が 23 箇所である。会話文 35 箇所のうち、22 箇所ではイタリア語訳でも反復表現で対応しており、残りの 13 箇所では非反復表現となっている。また、地の文 23 箇所ではすべて非反復表現となっている”ということである。

如上の表の数値の解釈とさらなる用例分析の結果、以下の諸点が指摘できる。

- (1) 会話文では、反復表現のほうが非反復表現よりも優勢である (22 : 13)。
- (2) 地の文では、もっぱら非反復表現が用いられている (0 : 23)。
- (3) 人名が呼格として反復されている場合は、イタリア語訳でも反復表現で対応する傾向があると思われる。たとえば、「兄さん、兄さん」《*Fratello, fratello!*》(「華岡」 p.106、伊訳 p.125)、「お母はん、お母はん」《*Madre! Madre!*》(「華岡」 p.127、伊訳 p.145)、「お母はん、お母はん」《*Madre! Madre!*》(「華岡」 p.130、伊訳 p.148)、「小陸さん、小陸さん」《*Koriku, Koriku!*…》(「華岡」 p.156、伊訳 p.172)
- (4) 非反復表現の場合、如何なる手段で反復表現の代替が行なわれているのであろうか。
 - ① 動詞の半過去形 (過去の継続態) を用いる方法。たとえば、(眼を) こすりこすり *sfregava* 「直訳: こすっていた」(「紀川」 p.93、伊訳 p.80)
 - ② 動詞 *ripetere* 「～を繰り返す」・動詞 *continuare* + a + 不定詞 「～し続ける」を用いる方法。たとえば、繰り返し繰り返し *ripetendo* 「直訳: 繰り返しながら」(「華岡」 p.117、伊訳 p.137)、くるくるくるくる廻っている *continuavano a girare* 「直訳: 廻り続けていた」

(「華岡」 p.93、伊訳 p.111-112)

- ③副詞 *continuamente* 「継続的に」・*molte volte* 「何度も」・*più volte* 「何度も」を用いる方法。たとえば、幾度も幾度も *continuamente* (「紀川」 p.176、伊訳 p.157)、幾度も幾度も *molte volte* (「華岡」 p.91、伊訳 p.110)、幾度も幾度も *più volte* (「華岡」 p.121、伊訳 p.140)、
- ④絶対最上級形容詞「非常に～な」を用いる方法。たとえば、長い長い *lunghissimi* 「直訳：非常に長い」(「華岡」 p.136、伊訳 p.154)
- ⑤per quanto+接続法構文「どれほど～しても」を用いる方法。たとえば、抑えても抑えても *Per quanto si sforzasse di soffocare* 「直訳：どれほど抑えようと努力しても」(「華岡」 p.69、伊訳 p.88)、抑えても抑えても *Per quanto tentasse di frenarsi* 「直訳：どれほど抑えようと試みても」(「華岡」 p.152、伊訳 p.169)

§6 まとめ

本稿は、有吉佐和子の小説2編に現われた「置語法による反復表現」がイタリア語訳においても反復表現となっているかどうかについて調査したものである。全体で58箇所の反復表現が抽出されたが、そのうちの22箇所が反復表現で訳されていた。そして、これらの反復表現による対応はすべて会話文におけるものであった。会話文に反復表現が多用される理由であるが、“会話文では、反復表現の躍動感を利用して、相手(=聞き手)の認知をより確実にしようとする欲求が話者の意識の根底に有るからであろう”と思われる。その証拠に、日本語原文において人名が呼格として反復される場合、イタリア語訳でも忠実な反復表現となっている。また、反復表現の代替表現としては、継続態を表わす動詞の半過去形や、「継続的に、何度も」の意を表わす副詞、などが使用されている。

なお、今回の調査結果に抛れば、日本語のほうがイタリア語よりも反復表現に富んでいるような印象もあるが、果してそうであろうか(注6)。イタリア語の小説に現われる「置語法による反復表現」が日本語訳においても反復表現となっているかどうかという逆方向の調査なども必要であろう。

注

- 1) 1931年、和歌山市生まれ。1967年『華岡青洲の妻』で第6回女流文学賞受賞、1970年『出雲の阿国』で第20回芸術選奨文部大臣賞受賞、1972年『恍惚の人』がベストセラー、1979年『和宮様御留』で第20回毎日芸術賞受賞。1984年東京都にて没。
- 2) テキストとしては以下のものを使用した。
有吉佐和子『紀ノ川』1964年1月、第3版、角川文庫(略号、紀川)
有吉佐和子『華岡青洲の妻』1978年9月、第21刷、新潮文庫(略号、華岡)
- 3) Sawako Ariyoshi: *Il fiume Ki*, traduzione dal giapponese Lydia Origlia, 1989,

Editoriale Jaka Book spa, Milano

Sawako Ariyoshi : *Kae o le due rivali*, traduzione Lydia Origlia, 1984, Editoriale
Jaka Book spa, Milano

- 4) 『紀ノ川』は 1959 年に、『華岡青洲の妻』は 1967 年に、それぞれ書かれた作品である。
- 5) 実は、ここは地の文の中に埋め込まれた会話文であり、地の文と会話文との中間的存在ではあるが、イタリア語訳では《 》内に記されているので、会話文扱いとしておく。
- 6) イタリア語の熟語における反復表現として以下のものがある。これらが日本語に訳される場合、必ずしも反復表現にはならない。(武田正實『現代伊語熟語大辞典』1982、日外アソシエーツより資料を収集)

adagio adagio 非常にゆっくり「直訳：ゆっくり ゆっくり」；**adesso adesso** ほんの今しがた「直訳：今 今」；**allora allora** まさにその時「直訳：その時 その時」；**al più al più** どんなに多くても「直訳：多くても 多くても」；**a mano a mano**=**man mano** 少しずつ「直訳：手で 手で」；**a palmo a palmo** 少しずつ「直訳：手のひらで 手のひらで」**a poco a poco**=**poco a poco** 少しずつ「直訳：少し 少し」；**a quando a quando** 時々「直訳：時に 時に」；**attorno attorno** ぐるりと「直訳：まわりに まわりに」；**ben bene** 非常に良く「直訳：良く 良く」；**che, che!** だめだめ、とんでもない「直訳：何と言う何と言う」；**così così** まあまあ「直訳：このように このように」；**forse forse** 恐らく「直訳：多分 多分」；**freddo freddo** 非常に冷やかな「直訳：寒い 寒い」；**già già** そうそう、まさにそのとおり「直訳：既に 既に」；**giù giù** どんどん下に「直訳：下に 下に」；**guarda guarda** これはこれは、おやおや「直訳：眺めろ 眺めろ」；**lecca lecca** ペロペロ舐め、アイスキャンデー「直訳：舐め 舐め」；**lemme lemme** ゆっくりと「直訳：その M そのM」；**mogio mogio** しょんぼりと「直訳：落胆して 落胆して」；**or ora** たった今「直訳：今 今」；**papale papale** はっきりと「直訳：法王の 法王の」；**pari pari** 文字どおり、そっくりそのまま「直訳：等しい 等しい」；**passo passo**=**passo a passo** ゆっくりと、少しずつ「直訳：歩行 歩行」；**prova prova, uno-due-tre uno-due-tre** ただ今マイクの試験中、放送席 放送席、本日は晴天なり 本日は晴天なり「直訳：試験 試験、イチニサン イチニサン」；**piano piano**=**pian piano** 非常にゆっくりと「直訳：ゆっくり ゆっくり」；**salve salve** これはこれは、やあ「直訳：礼砲 礼砲」；**sotto sotto** ひそかに、こっそりと「直訳：下に 下に」；**spesso spesso** 頻繁に、しょっちゅう「直訳：しばしば しばしば」；**subito subito** あっという間に「直訳：直ちに 直ちに」；**su su** どんどん上に「直訳：上に 上に」；**tondo tondo** 丁度「直訳：まるい まるい」；**torno torno** 周りにぐるりと「直訳：周りに 周りに」；**tosto tosto** 何かというつとすぐに「直訳：速く 速く」；**via via**=**vie vie** 次第に、だんだん「直訳：あちらへ あちらへ」